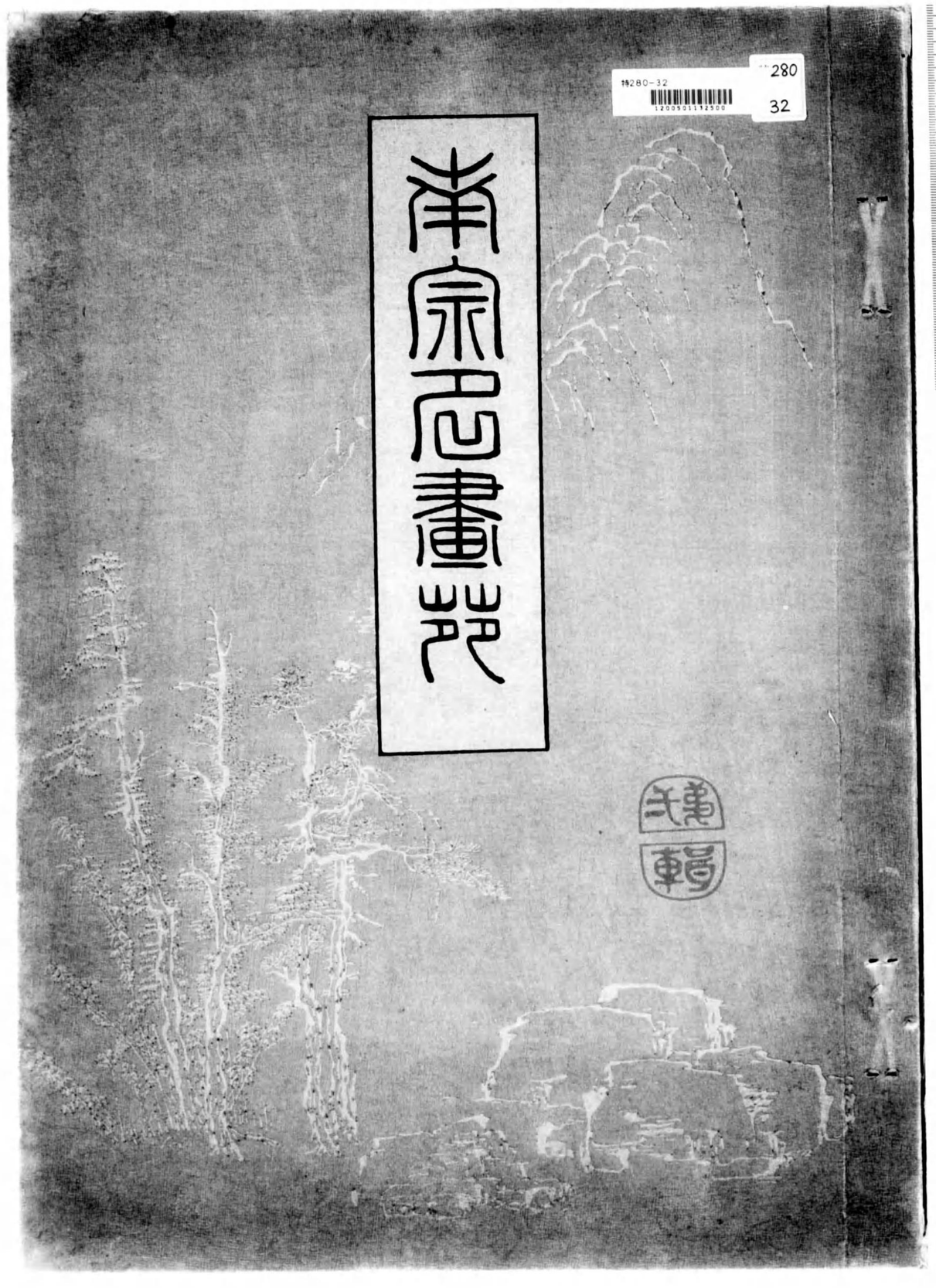

特280-32
120050111250
280
32

始

美濃古書誌

十洲細川潤署

南宗名畫苑

緒言

史に傳ふ、昔し軒轅氏の時、史皇始めて畫を造ると、蓋し繪畫の淵源や甚だ遠遠にして、最古の畫が果して如何なるものなりしか、之を知るに繇なしと雖も、降て六朝の世に至り、丹青の技大に進み、名手彬々として輩出したり、卽ち吳に曹弗興あり、晉に衞協顧愷之、史道碩、謝稚あり、宋に陸探微あり、梁に張僧繇あり、陳に顧野王あり、隋に展子處、董展、鄭法士等あり、是等の人々は皆史籍に其名を留めたるの大家なり、然れども、其遺蹟の一も現存するものなく、隨て其畫品を知る能はずと雖も、要するに此等六朝の畫家が李唐三百年の精藝を作り出すの階梯となりたることは爭ふべからざる所なり

世の支那の文學藝術を論ずる者必ず先づ唐朝を推さざるはなし、蓋し太宗不世出の英才を以て能く撥亂反正の功を成し、六朝以來の頹風を振作し、大に文藝を奬勵し、騁蕩たる太平の氣運を開拓して、貞觀の聖治を致せしかば、文學藝術の光は忽ち炫耀し、一代の名士鉅匠前後に輩出したる少なからず、則ち文章に於ては韓愈、柳宗元あり、詩に於ては李白、杜甫あり、哲則を後昆に垂れ、各其道の聖を以て稱せらる、而して繪畫の如きも上六朝を承けて頗る圓滿の域に達し、名家蠭々として起りしが中に、吳道玄は生意活動を以て稱せられ、李思訓は金碧輝暎の趣を以て優り、王維は淡淡鈎斫の妙を以て鳴る、而して吳道玄の佛像に於ける、筆法超妙、百代の畫聖として嘆美せられ、後世佛天人物畫を作る者皆これを宗とせざるなく、殊に李、王、二氏の山水畫は南北二宗千有餘年の基を開きたり、蓋し南宗北宗の稱たる、禪門の創唱したる所にして、其由來や弘忍大師（唐の高宗の朝）の門下たる慧能、神秀の二師が、一は實參實悟を旨とし、他は口辯說理を主として、互に法幢を建立したるに在り、世人乃ち神秀の法を以て北宗とし、慧能の禪を稱して南宗と爲すに至れり、願ふに李、王、二氏の山水に於ける、亦秀、能、二師の禪に於けるが如し、李思訓は唐の宗室にして、官は左武衞大將軍に至り、尊貴の地位に居し、其畫また隨て金碧輝暎なりしも、王維は身を儒生に起して、尙書右丞に官し、詩名一世に重く、胸次また洒々落々たりしかは、その畫く所の山水おのづから高雅幽遠の趣に富みしが如し、二者固より各其派を立て、畫を作りしにあらずと雖も、後の其流を汲む者仰いで以て鼻祖と爲し、遂に各自其派を唱ふるに至りしのみ、而して李氏を宗とするの一派は宋朝に至り、畫院を根據として、ます〳〵其勢力を成し、又王氏を趁へるの一派は專ら儒學に達し詩文に長ぜる脫俗の士によりて愛賞せられ、前者は則ち精巧縝密なるを尙へり、斯くの如く李、王、二家の精神氣魂は常に其流派の精神氣魂と爲りたるのみならず、江南は山水蘊藉にして榮紆、江北は

山水奇傑にして雄厚、人其間に生れて其氣を稟け、發して筆墨に現はれ、一は溫潤和雅なる南畫となり、他は剛健爽直なる北畫となりて、互に顯然たる特性を成すに至りたるものならん

李氏一派のことは玆に多くを說くの要なし、今王氏一派の發達の梗概を略敍せんに、王維の後、唐末に荆浩、五代に關仝あり、皆居然たる大手筆にして、大に其一派の特性を發揮し、南宗の面目を顯著ならしめたり、而して元には黃公望、王蒙、吳鎭、倪瓚の四大家あり、明に入りては沈周、文徵明、董其昌等の如き一代の碩儒皆王維を祖述し、荆浩、關仝の諸家に規倣し、且つ書畫一致の說を唱道して、書法を以て畫筆を行り、院畫に對峙して盛んに冲淡高逸の畫を作りしかば、南畫は遂に天下を風靡し、清代に至りては、王時敏、王原祁を始めとし、幾多の名家、踵を接して出でしに反し、北宗は殆んど地を拂ひて、また頹瀾を既倒に回す命世の大手筆を出ださず、夫の王石谷の如きは其畫に參酌するに北宗の趣致を以てしたれども、固より南宗の系統たるを失はず、斯くの如くにして明清は特り南宗全盛の時代と爲れり、是れ夫の禪家の北秀の法門萎微として振はず、其系統遂に斷絕せるに反し、南能の下、南嶽、馬祖、百丈、黃檗、臨濟等の巨匠碩德彬々輩出し、其門風特り旺昌を極めたると正に其揆を同うせり

轍て本邦に於ける斯派の起源を繹ぬるに、德川氏の中葉以降、清人伊孚九、費漢濱、李照秦、江稼甫等長崎に來航し、米家、倪氏等の畫風を提唱せしかば、本邦人の就て其法を學ぶ者亦尠からず、而して伊孚九の畫は文人墨客に最も多くの感化を與へたり、尙ほ是れより先き、支那黃檗の建築、法式の體裁より、飮食衣服の制に至るまで盡く明代隱元禪師來朝して、新黃檗を山城宇治に創し、其寺觀の風を傳へ、木菴、卽非、高泉等の如き詩文書畫を能くする者また相踵で來航し、畫界の奇傑陳賢の如きも、彫刻家范道生と共に隱元に隨て來朝せしもの〻如く、之に加ふるに、隱元等の將來せし明代名士の書畫頗る多かりしを以て、當時文人墨客の範を此處に求むる者尠からず、又明僧心越の亂を避けて我國に來り、水戸の祇園寺に住して禪定の餘暇、書畫篆刻の技を試むるあり、且つ祇南海、服部郭、柳里恭等の如き、夙に船載の典籍を究め、元明の古蹟を模倣して南宗の風格を研覈するあり、此時に方りて長崎の文人畫漸く京都に傳播し、其精英の凝るところ、遂に命世の巨擘池大雅を出すに至れり、而して當時これと衡を爭ふの謝春星あり、共に是れ一代鞱を爭ふの好敵手にして、其我國繪畫史上に南畫の新天地を開拓したる功偉大なるものあり、殊に大雅の門下は多士濟々として幾多の名流を輩出したり、然れども當時京都には寫生派の大家圓山應擧及び其の門下の高才逸足あり、松村吳春の四條一派また頗る其門戸を張りたるを以て、斯派の發展を爲すべき餘地十分ならず、且つ福原五岳以下の士多くは大阪に住して其手腕を揮ひしのみならず、十時梅厓、岡田米山人、其子半江等もまた此地に在りて旗幟を飜へし、九州の田能村竹田の如きも展來りて

編者識

阪地の畫界に少からざる感化を與へたるを以て、文化文政以降に於ける南畫の中心は京都より大阪に移りしものゝ如し、爾來南畫好尚の風潮は滔々として殆んど全國到處に瀰漫し、江戸には南北を併せ畫きし谷文晁を始めとし、渡邊華山、椿椿山、高久靄厓あり、京都には浦上春琴、中林竹洞、小田海僊、貫名海屋、日根對山、中西耕石等あり、紀伊には野呂介石あり、尾張には山本梅逸あり、仙臺には菅井梅關あり、上野には金井烏洲あり、而して九州には斯派の魁楚たる田能村竹田あり、其他一々枚擧に遑あらずと雖も、要するに支那文學の勃興と共に南畫の流行は實に我國近古の文藝史上に燦爛たる光輝を放てるものと云ふべし

蓋し南宗畫は沖淡高逸、氣韻超邁を以て其生命とするものにして、若し北畫を宇宙の仙に譬ふべくんば、南畫は則ち天界の神ならんか、王維、荆關、董、巨等の畫は今日之を觀るを得ざれば、其筆墨氣韻の如き、これを評論するに由なしと雖も、宋元以降の名蹟は猶之を覓むるに難からず、吾人屢此等の名蹟に對する毎に、其高妙幽遠の感に打たれずんばあらず、乃ち密に以爲らく、此等古今東西の名蹟を蒐めて梓に上し、以て汎く天下同好の士に頒たば、斯道を裨補する尠少にあらざるべしと、是れ吾人が茲に此畫苑を發行するに至りたる所以なり

終に臨みて一言すべきは所謂文人畫と南畫の別なり、文人畫は文人逸士が讀書點竄の餘に成す所の墨戲にして、固より南畫の部類に屬すべきも、南畫必ずしも文人畫にあらず、且つ文人畫の多くは其氣韻餘りありて筆力足らず、甚しきは濫りに山水竹石を塗抹して蠢鹵狂愚、殆んど繪畫の範圍を脱して邪徑に陷れるものあり、是の如きものは固より吾人の取らざる所、特り筆力氣韻兼ね備はり、能く南畫の特性を發揮したる優秀の作品のみを掲載せんとす、是れ吾人が特に南畫なるもの、精華を發揮するに留意する所以なり

明治三十七年二月

凡例

一、本書は支那宋元明清及び我國慶應の末年に至る南宗諸大家の遺蹟凡一百點を撰擇して撮影登載す

一、本書に網羅する材料の撰擇は、極めて愼密精正なるを旨とし、各畫家の一代を代表するに足るべき傑作にあらざれば之を登載せず

一、本書の材料は、汎く全國諸家の珍藏に就きて之を蒐集するものなれば、其配列は必ずしも年代順によらず、多くは撮影上の便宜に從へり、故に全部完結の後、別に年代順によりて總目錄を編成し、以て覽者の便に供すべし

一、一畫家の遺蹟中、非凡の傑作數點以上あるときは、俱に之を收載することあるべし

一、各挿畫に就きては、一々其原品の寸法、所藏主、及び筆者の略傳等を記載す

一、本書は十輯に分ちて之を發行し、各輯凡十葉宛を掲載す

一、本書の發行に際し、男爵細川潤次郎君は題簽の文字を揮毫して之を贈られ、又帝室博物館其他藏幅家諸君が其珍藏撮影の自由を與へられたるは、編者の頗る光榮とする所、茲に謹んで謝意を表す

明治三十七年二月　　編者識

南宗名畫苑第一輯

目次

秋溪閑適圖　沈周筆　一枚
雲煙山水圖　董其昌筆　一枚
松壑雲泉圖　張瑤圖筆　一枚
秋山飛瀑圖　同筆　一枚
月夜郵行圖　閻思筆　一枚
米點山水圖　藍瑛筆　一枚
水閣繙書圖　陳紹英筆　一枚
溪山鍾秀圖　王翬筆　一枚
桃溪歸渡圖　與謝蕪村筆　一枚
月下鳴機圖　渡邊華山筆　一枚

秋溪閑適圖絹本淡彩　支那明朝沈周筆

縱四尺六寸三分　横二尺三寸五分

子爵大久保忠一君藏

嶺ふに支那明朝は南畫全盛の時代にして無多の名家彬々として起りしも就中最も盛名を負へるものを沈石田文衡由名は其昌思白と號す、奥徽明字は徵屯、董玄宰名は其昌思白と號す、奥文中名は彬の四人と爲す此等の士は皆詩を能くし文に達し書に巧にして且つ畫に妙を得たりしかば天下の文人墨客仰いで以て一代の宗としたり古人皆て評して曰く沈石田は遠く荆浩洪谷子と號す唐末の人を師とし近く董源字は叔達北苑と號す、北宋の人を學び而して逆用の妙算に天趣を奪ふ文徵中は遠く郭熙北宋を師とし近く松雪趙孟頫字は子昂元初の人を學び而して氣韻神采一時に獨歩す董玄宰好んで唐宋の名筆を摹して前に古人なく呉文中思を迷らし奇を造し殆て前輩を望まず此數人は南宗の衣鉢を承けて出藍の譽あるもの、一代の神手と稱すべし、猶に出すものは卽ち沈石田の作にして、谷文晁等の諸名家皆愛して以て眞蹟疑なきを稱し、古來大久保家珍藏の一に數へらるゝ名品なり其布局の整齊にして筆致の超妙なる能く唐宋諸大家の壘を摩するものにして、洵に一代の名手たるに耻ちざるの作と云ふべし

沈周字は啓南石田と號し別に白石翁の號あり武宗の正德四年卒す歳八十有三

雲煙山水圖絹本墨畫　支那明朝董其昌筆

縱三尺四寸八分　横一尺八寸

東京　永井吉炳君藏

董其昌字は玄宰思白と號す明朝華亭の人なり萬曆中進士となり累進して禮部尚書に至る詩文書畫に精達し殊に書法を以て海内に重んせられ且つ畫は宋の董源字は叔達北苑と號す及び巨然を宗として造詣最も深く其山水樹石雲煙の插法の如き神氣充溢し風流蘊藉當時第一と稱せられたり崇禎九年八十有二歳にて卒す朝廷太子太傅を贈り文敏と諡す其著萬曆事實墓表南京翰林志容臺集畫禪室隨筆等皆世に重んせらる蓋し玄宰は明代の繪畫界に燦爛たる光輝を放てる南宗の大手筆にして且つ南北二宗の分派を極めて明晰に唱道喝破したる人なり茲に出すものは卽ち彼れの雲筆に成れる雲煙山水にして世上希れに觀る所の逸品なり其遠山近樹河川橋梁の布置配合實に絶妙なるのみならず雲煙濛々として山並樹林を罩むるの插法に至りては一氣福生動氣韻不可學此生面知之とするの概あり玄宰嘗て畫訣を論じて曰く畫家六法自有天授然亦有學得處讀萬卷書行萬里路胸中脫去塵俗爲山水傳神矣と何ぞ其言の高遠なるや覽者もし此潤自然丘壑内發立成鄭鄤隨手寫出畫に對して是言を味はば蓋し思半ばに過ぐるものあらん由來玄宰の作と稱する所の畫世に尠からざれども多くは魚目にして眞珠にあらず況んや此畫の如く彼れが平生の蘊蓄を發揮し來つて餘蘊なきものに於てをや

山水圖二幅絹本墨畫　支那明朝張瑞圖筆

第一松壑雲泉圖　縱五尺横一尺五寸七分

第二秋山飛瀑圖　縱四尺八寸二分横一尺六寸四分

男爵岩崎彌之助君藏

張瑞圖字は長公二水と號す明の泉州晉江の人なり神宗の萬曆中仕へて建極殿大學士となり召されて內閣に入る書に巧にしてまた畫を能くし殊に畫は元朝四大家の一人なる大癡道人黃公望字は子久の體法を學びて最も山水を寫すに妙を得たり殊に出す二幅は卽ち瑞圖の作中殊に優秀なるものなり兩圖共に蒼筆蘊藉にして淸淡秀潤布局淸新にして韻趣橫溢し觀る者をして覺えず脫俗の想あらしむ、殊に乙圖の如きは柳澤淇園法ふるに敍を以てして云く張瑞圖之書筆力遒勁拔俗絕倫其書不易得也然而書者適可以得畫則固不可得矣浪花七僧居士得瑞圖畫山水一幅携來示余余乃挂之款乃樣上覽之大岳突兀銅筆奇峻草屋枯木蒙濛長流恍如俾人遊於浪速方壺之間也姑以其書較其畫則如高遠也仔細觀之則一曲陽春井書之下也於戲圖也一大傑矣哉乞嗚呼朱明上下三百年丹青を以て一家を成せる者其數幾百なるを知らずと雖も此畫の如き傑作を出せる者は蓋し甚だ多からざるなり

日落犀峯陰天秋百泉鐘
白雲菴猶國

月夜邨行圖絹本淡彩　支那明朝闕思筆

縱四尺八寸、横　尺五寸八分

男爵岩崎彌之助君藏

闕思字は九思後に仲通と改む號を虛白と云ふ明の島程の人なり詩を能くし四體の書に巧にして又山水畫に長ず其畫法は荆浩洪谷子を師とし出藍の稱あり」を宗とし旁ら黄公望字は子久一峰五代の人にして荆浩を師とし出藍の稱あり」を宗とし旁ら黄公望字は子久一峰また大癡道人と號す元朝四大家の一人なり」に私淑せしが遂に自ら一機軸を出だし蒼秀奇崛變化自在の四大家の一人たり」に私淑せしが遂に自ら一機軸を出だし蒼秀奇崛變化自在の妙を極めたり技に出すものは則ち其畫故の示す如く明の崇禎三年九月望後李希の筆意に倣ひて描けるものにして彼れが作中の逸品なり看來れば皎々たる明月疎林を照らし滿眸の風光轉た蕭條たるところ人馬晚歸を急ぐの光景喧々異に過るを覺う恐らくは是れ山村月夜の盛興を掬して其靈筆に上せたるにあらざるか殊に近樹遠林の濃淡異に過る插法の如き一點一拂其精を失はず模糊たる雲烟の渲染と共に佳絶の極に達し覽む洵に近古稀に見る逸品なりと云ふべし者をして恍惚其境に遊ぶの思あらし

崇禎三年九月望日
仙舟筆

米點山水圖絹本淡彩　支那明朝藍瑛筆

縦六尺二寸二分、横一尺七寸四分

公　贈三條公美君藏

藍瑛字は田叔睫叟と號し晩年更に石頭陀と號す明朝錢塘の人なり山水は唐宋元諸家を法として自ら一格を成し人物花鳥梅竹倶に古人の精藍を得たりと稱せらる筆致初めは秀潤の趣あるしが後に沓勁の域に入り、山水畫を以て殊に其名當時に著はれたり故に其法を傳ふる者彬々輩出し就中陳璇玉奐馮從龍星洪都等皆繼を一方に稱するに至れり

市河米菴有名なる江戸の書家にして安政四年歿す歳八十の小山林堂書畫文房圖錄に云く往年高松板子洪穫藍畫十二幅遍忖知友分購と此幅また其中の一にして藍瑛が米南宮名は芾字は元章宋朝の大家の法に倣ひて描けるものなり米菴此畫を評して曰く筆致老勁變化縱横想ふに是れ筆到意隨の作なりと眞に知言と謂ふべし聞く故山内容堂侯深く此畫を愛玩せしが後故三條實美公に贈り公また之を珍重して措かず爾來三條家所藏名幅の一となりたりと

水閣繙書圖 絹本墨畫　支那明朝陳紹英筆

縱五尺六寸一分　横一尺六寸四分

男爵岩崎彌之助君藏

陳紹英字は生甫孤菴と號す明朝仁和の人なり仕へて南京刑部郎となりしが書を能くし、また畫は元朝の大家吳仲圭梅花道人の法を學びて絶妙の域に至れり、絹に揭ぐる一幅は淡々たる雲烟山嵐を累ね高樹曲渓相掩映するの處一個の韻士書を繙いて思を古今に馳するを圖したるものにして布局頗る簡潔加ふるに筆墨の皴法家尾樹石の沉淡一として沈雅老健ならざるはなく、尚に能く南畫の特性を發揮したるの名蹟なり夫の明りに山嶽疊々岡塘錯出樹石蕭然たるの畫を作りて以て古人の精藝を得たりとする凡庸畫史の到底企及する能はざる所なり

溪山鍾秀圖（絹本青綠）　支那清朝王翬筆

縱五尺三寸一分、横二尺五寸六分

東京帝室博物館藏

王翬字は石谷、耕煙散人また清暉主人と號す、初め王原祁字は茂京麓臺と號するを師として書法を學び、更に原祁の祖父王時敏字は遜之煙客また西廬老人と號するに就て其秘奥を受け、且つ北苑の長處を參酌して、新たに一機軸を出すに到れり、王時敏は當時清朝畫家の冠と稱せられたるの大家なりしが、翬の造詣頗る深きを稱揚し、是れ煙客の師なりと謂ふに至りしかば、時人亦翬を推稱して畫聖と爲したりと云ふ、康熙五十六年、八十六歲にて卒す（一說に康熙五十九年、八十九歲に卒せりとも云ふ）、抜に出す圖は、即ち王翬が康熙二十九年に描けるものにして、五十九歲の時に於ける老練圓熟の筆なり、展觀し來れば、峻嶺崢嶸として九霄を凌ぎ、阜丘參差として相連り、曲徑畫くるの處樓閣の遙に峙つあり、雲煙模糊たるの邊飛泉の高く懸るあり、或は松下の閑亭に兩個の高士相對して玄を談ずるあり、或は江頭の水閣一人の騷客思を悠々たる青山に寄するあり、一幅の縑素中幾多複雜の景致を收めて而も全局の經營布置極めて整正なるのみならず、筆々精妙傳彩淡雅にして、頗る珍賞すべき名品なり、彼れが畫聖の稱を得たる所以蓋し偶爾にあらずと云ふべし

桃溪歸渡圖絹本淡彩）與謝蕪村筆

縱四尺　一分樣　一尺二寸五分

男爵岩崎彌之助君藏

蕪村本姓は谷口字は春星又宰鳥と稱す初の名は長庚後に富と改むまた落日庵三果堂紫孤庵碧雲洞白雲堂四明夜半亭等の數號あり攝津國東成郡毛馬村の人にして其生地天王寺村に屬し村の蕪菁に名あるの故を以て乃ち自ら號して蕪村と云へり幼にして母氏の生家に養はる其生家は丹後國與謝郡に在り因て姓を與謝と更む一說には管て丹後に遊びて與謝に住し其山水を愛するの餘り自ら名づけしなりとも云ふ江戸及び奥羽諸州を歷遊し後京都に住す其晩年に就きては數說あれども天明三年十二月二十九日六十八歳にて歿したりとの說最も信ずべきが如し蕪村儒學に達し殊に俳諧を善くし且つ繪畫に妙を得たり畫は初め清人にして長崎に渡來せし伊孚九の法を學びしが後更に元明の諸家を涉獵し大癡元朝石田周朝の妙を兼ね吳小僊張路共に明朝の神髓を窺ひたりと稱せらる田能村竹田嘗て蕪村の畫を評して曰く用筆傅彩全然たる明人布置點景これを邊邑御境有るところの寂景に取る故に景は新たにして法は古く意を用ふること最も深し高名の下虛士なし洞に評ひざるなりと吾人今此圖に對して斯評の能く其肯綮に中れるを見る此畫や蓋し邊邑の實景を捉へ來れるものにして布置按排の高妙なる筆致傅彩の秀潤なる艇る者をして心神恍惚身も亦圖中に在るの思あらしむ筆者の手腕卓拔ならずんば焉くんぞ此に到るを得んや本邦南畫中而れに見るの逸品といふべし

月下鳴機圖絹本淡彩　渡邊華山筆

縦四尺一寸二分、横一尺八寸五分

男爵岩崎彌之助君藏

渡邊華山名は定靜字は子安又伯登通稱を登と云ふ、華山は其號なり、また西繪堂全樂堂昨非居士金瓢居隨安居士等の別號あり、三河國田原侯の藩臣にして寛政五年江戸の藩邸に生る、少にして大志あり藩儒鳳見東嶋に就て學を修め後また佐藤一齋の門に入る、頗る書史に渉獵し、兼て洋學に通じ、且つ畫を善くす、一日友人某來り謂て曰く、子儒たらんと欲す、誠に善し、然れども子や貧なり、儒を學ばんよりは寧ろ畫を學びて早く黄金を得るの勝れるに如かずと、華山性至孝、父母に事ふる甚だ努む、友人の言を聞き感じて曰く、儒を學びて以て天下に爲すあらんとす、父母の飢寒を如何せん、姑く粥を飲みて畫に從事せんと、乃ち谷文晁金子金陵の諸家に就き畫法を學ぶ、而も家貧にして良紙を購ふ能はず、日に十六文乃至二十四文を投じて纔に美濃紙を買ひ、畫を寫す、後諸家を折衷し、古法に則りて遂に一家を成すに至れり、當時外船類りに沿海に來り、王下攘夷の異論まち〳〵囂んなりしにより、華山深く之を憂ひ、缺舌小記慎機論等を著はして之を排せしかば、遂に幕府の忌諱に觸れて獄に投せられ、後宥されて國に幽せらる、華山幽中に在りて愁色なく、屢書を裁して友人と貽答す、幕府幽囚者の妄りに書翰を往復するを藩侯に諫め、其怠惰を誡す、華山曰く、藩侯吾を以て罪を幕府に得、吾何ぞ生を偸むを得んと、乃ち自殺す、年四十九、時に天保十二年十月十一日なり、華山生前其所藏の書畫數百を擧げて藩侯に獻ず、或人華山に謂て曰く、君積年心を用ゐて獻ずるの子孫もし其貴ぶべきを知らずして之を重んぜず、或は散佚し、或は蠹魚に付せば、余が丹精何の益あらん、もし子孫もし其貴ぶべきを知る者あらば、亦余の如く之を集むべきのみと、或人其公益を思ふの切なるに感じ、默して去りしなり、華山の畫は、文政十二年、即ち華山が三十七歳の時の傑作にして、千峰萬壑、皆烟霞を吐出す、畫は則ち華山自題の詩中に云へる如く、一輪の凍月寒天に懸り、風露凄然たる茅屋の裡、金衣玉食の徒を戒むるにあり、其寓意の高遠なるは言ふまでもなく、反の龜布を成すの辛苦容易ならざるを示し、以て筆致頗る慎密にして、經營布置また絶妙の域に達し、清韻奇趣縑上に溢る、嗚呼華山の如きは愛國愛民忠孝兩全の君子たるのみならず、亦實に南畫界の大手筆なりと云ふべし

明治三十七年二月八日印刷
明治三十七年二月十二日發行

（價金一圓八錢）

編輯兼發行者　京都市上京區南禪寺町三十三番戸　田島志一

印刷者　東京市下谷區二長町五十二番地　梶間春三

活版印刷所　東京市京橋區築地二丁目十七番地　株式會社東京築地活版製造所

發行所　東京市下谷區二長町五十二番地　審美書院
電話下谷一一二六番

不許複製

終